

○野生状態で見出された外来種ウスユキマンネングサ *Sedum hispanicum* L. (大場秀章) Hideaki OHBA: On a naturalized *Sedum*, *S. hispanicum* L., in central and northern Honshu, Japan

Sedum hispanicum L. (ウスユキマンネングサ) が福島県や群馬県で野生状態で見出されていたことを報告する。

福島県喜多方市在住の金田善一氏が伊藤洋博士に送られたマンネングサの 1 種があり、伊藤先生からこれを同定する機会を与えられた。調べた結果これは *Sedum hispanicum* L. であった。その後金田氏からの手紙でこのマンネングサが福島県耶麻郡熱塩村黒岩愛宕山に産することは地元の植物愛好家の間でかなり以前から話題になっており、その最初の発見者は恐らく庄司寅七氏ではないかというお知せを受けた。他方、国立科学博物館には群馬県沼田で武井武一氏が 1955 年に採集した標本が未同定のまま収蔵されていた。さらにユビソヤナギやフカオヤナギの発見者である深尾重光氏が 1965 年 7 月¹⁾に群馬県利根郡水上に野化している本種を採集し、菅谷貞男博士は *S. hispanicum* L. var. *minus* Praeger と同定している。

1978 年、深尾氏は水上町の生育地を訪ね現況を調べてくださったので、同年及び 1980 年に生育地を観察した。水上町では 2 ヶ所にみられる。阿能川では護岸敷石の間に生えていたが個体数は少なく、湯檜曾では石垣、路傍に生え個体数も多く次第に生育場所を拡げつつあるようにみえた。

S. hispanicum は地中海要素のひとつでスイス、イタリアからバルカン半島を経てコーカサスおよび小アジアにいたり、マンネングサ属としては比較的広い地域に分布し、形態上かなり大きな変異が認められる。しかしその種内変異についてはまだ解析が殆んど進んでおらず、種内分類群を認める状況ではない。菅谷博士は水上の標本を Praeger が記載した var. *minus* に当て変種として区別したが、現状では種内変異の分類は困難である。ところでウスユキマンネングサの各花環の員数が自生地 of の個体では通常 6 であり、5 あるいは 7 から 9 になる個体ないし花は稀なようである²⁾。ところが日本に野化している個体の殆んどが 5 数性である³⁾。

S. hispanicum がこのように日本でも見出されるにいたったが、これが天然分布の拡

¹⁾ ラベルに 1940 (昭和 15 年) に採集したように記した標本 (東北大学理学部生物学教室蔵) もあるが添付の書簡の日付から 1965 年の誤記と思う。

²⁾ Praeger (1921) は通常 6, 時に 4, 5 あるいは 7 から 9, Berger (1930) は 6, 稀に 4 から 9, Fröderström (1932) は 6 か 7, 稀に 5 あるいは 8, Huber (1963) と Webb (1964) は 6, 稀に 7 から 9 としている。検した欧州産の標本の殆んどは 6 数性で、5 数性の花は少ない。

³⁾ バルカン半島南部から小アジアに分布する *S. hispanicum* に近縁な *S. pallidum* Marsch.-Bieb. は 5 数性の花をもつ。この種もここで問題としている植物に似ているが、主に子房が濃赤紫色になるので異なる。

大でなく、人為による分布とみることに異論はない。本種は園芸植物としてすでに大正末期に日本に移入されていた（目賀田・石井 1952）。そこで野化したものは栽培からの逸出ではないかとも推量されるが、特に福島県の場合のように人里からかなり隔ったところで見出されている点、何か別の帰化経路があったことも十分に考えられる。

ウスユキマンネングサという和名の初出を明らかにしえなかったが適切な和名だと思う。杉本（1965）は本種にこの和名を用い、イソコマツとシロガネツヅキという名も異名として引いている。

この拙文を書くに当たり、色々ご協力いただいた佐竹義輔博士、深尾重光氏、金田善一氏、緑川謙二氏、山崎敬先生、また東北大学理学部生物学教室（TUS）と国立科学博物館植物部門（TNS）の標本利用を許された相馬寛吉教授、金井弘夫博士に厚くお礼申し上げます。

Summary Recently I have realized that *Sedum hispanicum* L. occurred naturally in some localities in central and northern Honshu, Japan. *S. hispanicum* is known as a good representative of Mediterranean flora in *Sedum*, ranging from E. Mediterranean to Caucasus and Asia Minor. Thus, its presence in Japan is regarded as an artificial extension. The naturalized plant is growing on or among exposed roughish rocks, and has mostly 5-merous white or pinkish flowers.

Localities (specimens examined are cited in parentheses). Central Honshu: Gunma Pref., Numata (B. Takei 13, TNS), Tonegun, Minakami (S. Hukao s.n. 15 July 1965 [as 1940], 23 July 1965, 25 July 1965, TUS; H. Ohba s.n. 30 July 1978, 27 Aug. 1980, TI). Northern Honshu: Fukushima Pref., Yamagun, Atsushiomura, Kuroiwa (Z. Kaneda s.n. in 1977 [from the stock cultivated at Ichinoki, Yamatomachi, Yamagun], TI).

引用文献 Berger, A. 1930. In Engler & Prantl, Die nat. Pflanzenfam. 2 Aufl. 18a: 459-462. Fröderström, H. 1932. Act. Hort. Gothob. 7: append. 79-84. Huber, H. 1963. In Hegi, Ill. Fl. Mitt.-Europa, 2 Aufl. 4: 97-98. 目賀田守種・石井勇義, 1952. 石井編園芸大辞典 3: 1303. Praeger, L. 1921. J. Roy. Hort. Soc. 46: 299-301. 杉本順一 1965. 草本植物総検索誌双子葉篇, 266. Webb, D. A. 1964. In Fl. Europaea 1: 356-363. (東京大学理学部附属植物園日光分園)

□原高義：山草生活史 244+12 pp. 口絵8葉. 1980. 誠文堂新光社，東京，¥2,600. 昭和53年3月から2年間ガーデンライフに連載されたものを書き改めて出版したもの。著者は十勝に住む人なので日本の中部以北の高山植物を主とし、栽培の実験と用土とを挙げ、果実及び種子を独特の図柄にしたものである。リンドウやツツジ、ビランジなどほんとうに多様な種子で驚かされる。山草発芽日調査表は参考になる。（前川文夫）